

## ストーリー構築における視点：日本語母語話者と上級学習者との比較から

浜松市立細江中学校 栗原 由華  
東京外国語大学 中浜 優子

### 1. はじめに

ストーリーを構築する上で、日本語では、特定の登場人物に視点を置き、その人物を中心に話を捉えるのに対し、中国語、韓国語では、話の中で起こった事象を中心にストーリーを描写するということが、先行研究より明らかになっている（田代 1995, 渡辺 1996）。本研究は、日本語母語話者（JNS）と韓国語・中国語をそれぞれ母語とする上級日本語学習者のショートストーリー構築における視点の置き方の比較考察を行ったものである。先行研究では、視点を考察する際に、ヴォイス、授受表現といった文法項目を中心に分析がなされてきたが、本研究では、その2項目に、移動動詞、主観表現、準感情表現、感情表現の4項目を加えた6項目を分析対象とした。そして、視点の中でも特に物語の登場人物の誰の位置に立って話しを捉えるかを意味する「視座」に着目し、調査を行った。

### 2. 調査方法・被験者

5コマからなる、登場人物が2名の漫画のストーリーを自分なりに解釈して記述してもらった。この際、1) 内容をわかりやすく日本語で記述する、2) 表現方法、記述の長さ、登場人物の人物設定は自由である、3) 会話文だけの記述はしない、という指示を与えた。被験者は、JNS 39名、韓国人上級日本語学習者（KJL）19名、中国人上級日本語学習（CJL）17名の合計75名である。KJLは、日本で学ぶ大学生で、滞在期間の平均が2年6ヶ月である。一方、CJLは日本で学ぶ大学生、大学院研究生、大学院生で、滞在期間の平均が2年2ヶ月である。KJL、CJLともに、日本語レベルは、日本語能力検定1級合格程度である。

### 3. 結果

記述されたストーリーの中から、ヴォイス、授受表現、移動動詞、主観表現、準感情表現、感情表現の6項目を抽出し、1) 視座の置き方、2) 視座を表わす構文的手がかりの産出傾向について、母語話者と学習者を比較し、分析を行った。以下に結果を示す。

#### 3.1. 視座の置き方

手がかりから、登場人物の誰に視座を置いているかを分析した。その結果、JNSの69%は登場人物の一人に視座を置き、13%が両方の登場人物に視座を置いていた（残り18%は手がかりなし）。また、KJLの68%は登場人物の一人に視座を置き、両方に視座をおいたのは26%であった（5%は手がかりなし）。このように、JNSとKJLは登場人物の一人に視座を置く割合が高いのが分かった。これに対し、CJLは登場人物の一人に視座を置いたのが53%、両方に視座を置いたのが47%と、ほぼ半数の被験者が視座を特定の人物に置かないという傾向が認められた。

また、視座を両方に置いた場合を見ると、JNSが同一局面で視座を両方の登場人物においた例が2例しか見られなかったのに対し、CJLでは視座を両方においた47%の全てが、同一局面においてであった。KJLは5

られなかったのに対し、CJLでは視座を両方においた47%の全てが、同一局面においてであった。KJLは5名中3名が同一局面で両方に視座を置いており、CJLに近い傾向が見られた。

### 3.2. 手がかりの産出傾向

産出された手がかりの総数は、JNSが94、KJLが61、CJLが68であった。それらを6項目に分けたところ、3グループの手がかりの総数に対する、各項目の産出率には同じような傾向が見られた。ただし、KJL、CJLともに、主観表現、準感情表現、感情表現といった心情的表現が、JNSより多く産出されていた。特に、準感情表現については、CJLはJNS、KJLに比べ、使用割合が高く、JNSの約2倍であった。

## 4. 考察

上級学習者と母語話者では、視座の置き方の違い及び視点に関連するとされる手がかり構文の産出パターンに違いがあるのが分かった。また、同じ上級学習者間でも、母語の違いによって異なるパターンが認められた。KJLの場合、JNSのように、導入から終結まで一人の登場人物に視座を置いてストーリーを展開した被験者が多数を占めたのに対し、CJLではほぼ半数が両方の登場人物の視座からストーリーを記述していた。しかし、単独の登場人物に視座を固定しなかった被験者のデータを見たところ、KJLとCLJに「同一局面での視座の移動」という共通のパターンが見られた。JNSによる視座の移動は、(2例を除いて)局面が変わる時にしか見られなかったことから、同一局面内での視座の移動は学習者特有の談話構成パターンであり、中国語・韓国語の母語での傾向が、第二言語としての日本語の物語談話構築に、負の転移という形で現れたのではないかと考える。

KJLの多数が、視点を一定の人物に定めて物語を展開していったという本研究の結果については、韓国語話者が立場志向を取らず、起こった事象を中心に物語を構築していくという、先行研究の結果からは予測できないものであった。この違いは、本研究が、今までより広い角度から視点というものを捉えたことにより生じた可能性もあるので、従来理解されてきた韓国語と日本語での視点の置き方に関する捉え方はもとより、視点を表わす構文の手がかりをも見直す必要があるのではないかとと思われる。

また、手がかりの産出傾向を見ると、全体を通しては大きな差異はないものの、学習者は感情を表す表現をより多く使用することが明らかになった。さらに、母語話者と学習者では、物語を構築する際、ストーリー導入・展開部においては顕著な差は見られないものの、話の要となる最後のシーンの描写の仕方がずいぶん違うという点である。母語話者は、話の導入・展開部分をヴォイス、授受表現、移動動詞を中心に、同一の視座から描写し、最後の局面で、心情を集結して描写する傾向があった。これに対し、学習者は、始めから登場人物の心情を表現しながら状況を描写し、物語談話を展開していくという傾向を見せた。

本研究から、文法能力の高い上級レベルにおいても、学習者特有の談話構成パターンが存在することが明らかになったわけであるが、話し言葉とは違い、意志伝達障害が生じた場合の修復が不可能な書き言葉の性質を考えると、学習者に物語の談話構成に関する意識化を促す必要性が高いことは明確である。

### 参考文献

田代ひとみ (1995) 「中上級日本語学習者の文章表現の問題点－不自然さ・わかりにくさの原因をさ

ぐるー」『日本語教育』85号、pp.25-37、日本語教育学会  
渡邊亜子（1996）『中上級日本語学習者の談話展開』くろしお出版

#### 用語リスト

**視座**：従来の「視点」を、「だれが見るか、登場人物のうち、誰と同じ位置に立つのか」、「そこから何を見るのか」に二分して捉え、前者を「視座」、後者を「注視点」とした。